

佳作

## 母のノートと私の絵本

山梨県 山梨県立北杜高等学校三年 松村 希愛

中学生の時、物置の奥を整理していた時、埃をかぶった箱の中から一冊のノートと一冊の絵本が出てきた。絵本のタイトルは『小さなあなたへ』。表紙はきれいで、母が大切にしていたことが伝わった。隣に置かれたノートを開くと、見覚えのある丸みを帯びた文字が並んでいた。それは母の字だった。ページをめくると、いくつかの日付とそれに添えられた短い言葉がぼつりぼつりと並んでいた。私が小さかった頃のこと、たわいもない出来事として記されていた。特別なことは書かれていなかった。けれど、その一言一言から母が私の何気ない日々をととても大切に思ってくれていたことが伝わってきた。

その頃の私は、思春期真っ只中で家族、特に母との距離を感じ始めていた時期だった。素直に甘えることが恥ずかしくなり、母の言葉に反発してしまうことも多かった。みんな嫌い、誰も分かってくれない、そんな気持ちを抱えながら心のどこかで、母の存在を遠ざけていた。

私は、絵本『小さなあなたへ』をそっと開いた。それは読んだ記憶も、読み聞かせてもらった記憶もない本だ

った。けれど、ページをめくるたびに、胸の奥がじんわりと温かくなるのを感じた。母親が子どもへ向ける言葉でつづられたその絵本には、優しさと強さ、そして深い愛情がつまっていた。「あなたが笑った日、私は世界が光ったように感じた」「あなたが悲しむとき、私はそのとなりになりたいと思った」「あなたがどれだけ大きくなくても、私はずっとあなたの母親です」「私はあなたよりも先に年老いて、先にいなくなるけれど、その日まで、ずっとあなたのそばにいる」。

その言葉たちは、まるで母からの手紙のようだった。きっと母は、私が小さい頃ではなく、もう少し大きくなった時に、この本を私に渡すつもりだったのだろう。ノートと一緒に。母の気持ちを絵本とノートに託して。でもそのタイミングを逃してしまったのかもしれない。幼い頃あんなに何度も伝えてくれた「私は何があってもきーちゃんの味方だよ」「きーちゃん大好きだよ」という言葉も自然と聞かなくなっていた。だからこそ物置から出てきたノートと絵本に心打たれた。

私は絵本とノートをそっと胸に抱えた。何も言わず自分の部屋に持ち帰った。その日の夕方、台所からは私の大好きな豆腐ハンバーグの香りが漂ってきた。食卓にはいつものように温かい色鮮やかなごはんが並べられていた。私は静かに席に着き、豆腐ハンバーグを一口食べた。温かさが胸の奥までしみこんでいくようだった。私は言葉にはしなかったけれど、心の中でそっとつぶやいた。

「わたしも、大好きだよ。大事にするね」。それだけで、その日は十分だった。

あの日見つけたノートと絵本は、今も私の引き出しの奥にしまっている。ページを開く度、母の優しさ、愛情を感じている。そして、幼かった私のことも。きっと私はこれからも何度もそれを開いて、母の思いに触れるのだらう。私は母のような、優しく愛にあふれた人になりたい。